

大学時報

UNIVERSITY CURRENT REVIEW

No.388

2019

9

隔月刊



仏教総合博物館「龍谷ミュージアム」(龍谷大学)

特集 留学生に対する学習面での日本語サポート

座談会 学生実態調査の活用と課題

小特集 大学の事務業務改革

明日への試み 中央大学 わが大学史の一場面 国際基督教大学

加盟校の幸福度ランキングアップ 石巻専修大学／関西学院大学

クローズアップ・インタビュー 画家 少路和伸さん

日本私立大学連盟



守屋多々志筆屏風絵「アメリカ留学（津田梅子）」



津田梅子の着物

津田梅子の着物と屏風絵「アメリカ留学（津田梅子）」

1871（明治4）年12月23日¹、津田梅子は欧米視察の岩倉使節団一行に加わり、日本最初の女子留学生としてアメリカへ旅立った。横浜港出航の際に着用していたのは、朱地に金糸や色糸の刺繍と染で総模様を施した絹のきもである。裾には流水を配し笹を散らすとともに梅が立樹風に描かれ、肩口から袖、背にかけては雲鶴に松、菊などの吉祥文様、胸元と背には軍配団扇、筆、硯などの縁起・道具文様が置かれている。身丈105センチ、桁54センチの小さなきものは、幸運と守護、そして学問成就の祈りを込めて詠えられたものだろうか。

一行を乗せた米国太平洋郵船の外輪船アメリカ号は23日間の航海を経て、翌年1月15日にサンフランシスコに到着した。『特命全権大使米欧回覧実記』には、その時の様子が次のように記されている。

「此^{この}晚^{あけ}ハ、咫^は尺^はモ辨^わへヌ程^{ほど}ノ深霧^{ふかき霧}ニテ、甲板^{こうばん}ノ上^{うへ}ハ津^つ瀧^{たき}ヲナスニ至^{いた}ル、故^{ゆゑ}ニ洋中^{やうちゆう}ニシハシ船^{ふね}ヲ止^{とど}メ、黎明^{れいめい}ヲ待^{まち}シニ、天明^{ていめい}ニ霧^{きり}モ彷彿^{ふつぷつ}ニ消^きレハ、前^{まへ}ニ加利^{かり}福^{ふく}尼^{にあ}ノ諸^{あろ}山^{やま}頭^{あたま}レタリ」²

本学小平キャンパス・視聴覚センター階ホールに、院展同人・守屋多々志筆四曲一隻屏風絵「アメリカ留学（津田梅子）」が展示されている。そこには、遠く霧の晴れ間から姿を現わしたアメリカ大陸を見つめる5人の少女の中に、赤い鼻緒の草履を脱ぎ棄てて甲板の手摺に上り、前方を見据える幼い津田梅子がいる。横浜出航の10日後に太平洋上で満7歳の誕生日を迎えた梅子が再び日本の地を踏むのは実に11年後、さらに、再度のアメリカ留学を経て、自立した女性を育成する私立の高等教育機関として女子英学塾を設立するのは1900（明治33）年9月、35歳のときである。

1 以下、年月日は新暦で記載

2 久米邦武編 田中彰校注『特命全権大使米欧回覧実記』岩波文庫版（一）岩波書店
1977年 75頁

大学時報

No.388

2019.9

Thesaurus Universitatis だいがくのたから

津田塾大学

表紙・大学点描 龍谷大学

巻頭言 自省力他

入澤 崇

評価をめぐる雑考

大場昌子

座談会 学生実態調査の活用と課題

江原昭博／前田浩司／前畑良幸／(司会)

音 好宏

特集 留学生に対する学習面での日本語サポート

留学生に寄り添う日本語自律学習支援

寅丸真澄

兵庫国際交流会館でのライティング支援——神戸大学の取り組み——

森田耕平

大学院における留学生支援——明治大学の日本語論文作成支援を中心に——

外池 力

学内リソースを生かした日本語サポートの設計

丸山千歌

——「オール立教」の取り組みが留学生へのメッセージ——

すいそり 看護教育雑感

糸魚川順

小特集 大学の事務業務改革

新たな働き方により、新たな価値創造を

——上智大学における取り組み（在宅勤務制度と窓口時間短縮）——

須田誠一

ICTを活用した働き方改革——近大流大学業務改革——

高木純平

前川昌則

62

58

56

54

46

44

36

32

30

14

10

4学部を「つなぐ」ことによって目指すもの

——法政大学多摩事務部学務課の取り組み——

須藤智徳

68

事務組織の課題と改編

永和田隆一

74

私の授業実践——教育現場の最前線から

情報過多な授業の見直し

柴田佳純

78

明日への試み

中央大学国際経営学部 経営学教育のグローバル化への挑戦

河合久

80

わが大学史の一場面——日本の近代化と大学の歴史

場所の磁力 引き継がれたものたち・国際基督教大学

松山龍彦

86

加盟校の幸福度ランキングアップ《AI（人工知能）編》

高大産連携プロジェクトによる地域振興・石巻専修大学

佐々木慶文

94

AI活用人材の育成・関西学院大学

已波弘佳

96

クローズアップ・インタビュ―

画家 少路和伸さんに聞く

(聞き手) 外川智恵

98

執筆者・出席者のご紹介・106

連盟ニュース・108

編集後記・110

(カット) 熊谷有子

〈表紙写真〉

仏教総合博物館「龍谷ミュージアム」 (龍谷大学)



龍谷ミュージアムは、龍谷大学の創立370年周年を記念し2011年に日本初となる仏教総合博物館として開館しました。本館は龍谷大学の建学の精神を具現化する教育研究施設として、これまで約70万人の方にご来館いただいております。また、教育研究施設という大学博物館の枠を超え、街に開かれた博物館として展覧会事業をとおした仏教文化の普及に努めています。

本館の展覧会は仏教の誕生から現代の仏教までをアジアの仏教と日本の仏教からわかりやすく紹介するシリーズ展と仏教や仏教文化、仏教美術などに関する様々なテーマを設けた企画展、特別展など多彩な展覧会を開催し、豊富な学術資料や文化財に関する研究成果を現代的な展示方法によりご覧いただけます。中でも実際に現地の大回廊に入り込んだような体験ができるベゼクリク石窟寺院のデジタル復元による壁画回廊は必見です。仏教と仏教文化に思いを巡らす理想のミュージアム、龍谷ミュージアムにお越しください。

大学点描

You,
Unlimited



ready?

進化し続けているか。

固定観念にとらわれていないか。多様な価値観を受け入れているか。

国境や文化を越えて、自分を磨く覚悟はあるか。

私たちは、つねに本質を問い続け、答えを出し続ける。

豊かなアイデアとひたむきなチャレンジで、未来と深く強くつながっていく。

目の前に広がる無限の地平に向かって。

さあ、共に新しい一歩を踏み出そう。

未来は、君たちを待っている。

380
YEARS
ANNIVERSARY

You,
Unlimited



線は、ここにある。



2020年4月、瀬田キャンパスに開設

- | | |
|-------------|-----------------|
| ■ 数理・情報科学課程 | ■ 知能情報メディア課程 |
| ■ 電子情報通信課程 | ■ 機械工学・ロボティクス課程 |
| ■ 応用化学課程 | ■ 環境生態工学課程 |



未来への境界

龍谷大学先端理工学部

Faculty of Advanced Science and Technology

You,
Unlimited



“You, Challenger” Project

“You, Challenger” Projectは、龍谷大学での学びを背景に、
未来に躍動する学生の様々な挑戦をとりあげるプロジェクトです。
自分たちの活動で未来を拓いていく学生の姿をクローズアップします。
プロジェクトでは、学生も教員もひとつになって様々なチャレンジを行います。
右のQRコードより、龍大生たちの日々のチャレンジを覗いてみませんか。
3月に、様々なチャレンジの集大成をプレゼンテーション形式で発表します。
今から、龍大生たちの日々の挑戦を、ともに体感しましょう。



龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY

文学部 経済学部 経営学部 法学部 政策学部 国際学部
理工学部※ 社会学部 農学部 短期大学部

※2020年4月 先端理工学部を開設



大学時報

No.388

2019.9



自省利他

入澤 崇 ● 龍谷大学長

龍谷大学は本年、創立380年を迎えるにあたり、建学の精神に基づく新たな実践哲学「自省利他」じせいりたを発信する。

排他的傾向が強まる現代社会にあつて、学生は「生きづらさ」を感じ始めている。自覚し難い利己心の払拭に努め（「自省」）、他者の幸福の創造に努める（「利他」）人間の育成が急務と考える。

教職員と学生が、建学の精神である「浄土真宗の精神」に学び、創立380年を機に龍谷大学の使命を血肉化していきたい。

評価をめぐる雑考

大場 昌子 ● 日本女子大学学長

日本女子大学（1901年の創立時は日本女子大
学校）は、20世紀の幕開けとともに創立され、20
21年に創立120周年を迎えようとしている。現
在も、創立者成瀬仁蔵（1858―1919年）が
遺した三綱領——「信念徹底」「自発創生」「共同奉
仕」という三つの教育理念を教育の柱として受け継
ぎ、日々実践している。約120年もの長きにわたっ
て私立の女子高等教育機関が存続してきた事実自体
が、本学を含む伝統ある私立女子大学が日本社会に
おいて果たしてきた役割に一定の評価をいただいで
いる証と解釈してもご批判は免れるものと思う。

このような評価を大切にする一方、近年、大学は
教育の質保証と可視化を一層求められている。学生
が在籍する4年間を対象とした評価である。各大学
はアドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリ

シー、およびディプロマ・ポリシーの3ポリシーを
策定することにより、入学時に求められる能力、卒
業時にどのような力を修得させようとしているのか、
そのためにどのような科目を設置するのかについて、
具体的内容を明文化し、公表している。こうして教
育の到達目標が明示されると、次の段階としては、
その目標がどれほど達成されているかを各大学が評
価する作業が必要とされる。この作業における評価
方針がアセスメント・ポリシーであり、各大学は評
価結果を公開し、社会に対して教育の質を保証する
責任を果たしていくことになる。昨年11月に公表さ
れた中央教育審議会の「2040年に向けた高等教育
のブランドデザイン（答申）」の中にも、「何を学
び、身に付けることができるのかが明確になっ
ているのか、学んでいる学生は成長しているのか、学修の

成果が出ているのか、大学の個性を発揮できる多様な魅力的な教員組織・教育課程があるかといったことは、「どのような大学が学修者の視点から見た質の高い大学であるかについて」「重要な要素となる」(28ページ)と書かれていることから、教育の質を可視化する取り組みはますます強く要求されるようになるであろう。

日々の教育活動の中で教員として学生の学修成果を評価する際には、学生に対して成績評価の根拠を論理的に説明できることが重要であり、迷いやぶれが生じないように、事前に作成した客観的指標を意識することに心を砕く。例えば期末試験の記述式問題やレポートなどでは、細かく定めたループリックやCAN-DOリストなどの評価項目に照らしながら到達度を採点し、1学期間の授業の成果を測るわけである。

しかし、4年間を対象として学生の能力の向上具合を見るためには、到達度を測る作業だけでは不十分であり、さまざまな調査を実施して、画一的でなく多面的な、よりスケールの大きな測定が必要となる。本学では、前述した三綱領を礎としたディプロ

マ・ポリシーを定めており、その第一に掲げている「建学の精神を理解し、ひとりの人間として、女性として、国際社会の一員として、自立することができると」という項目について個々の学生を評価するとなれば、自校教育科目、ジェンダーに関する科目、外国語科目などの授業科目の成績評価も参考にはするものの、「自立する」ために必要な力——すぐに思いつくだけでも、判断力、表現力、行動力、持続力、発想力など——についても何らかの方法で評価が求められる。人間の持つこうした種類の力を評価することはなかなか難しいと感じるのは私だけではないだろう。各種の調査を複数、継続して実施することにより、できる限り適切な評価方法を策定していくことが目下の課題である。

先日タクシーに乗っていたら、たまたま車内の小さなディスプレイに流れていた動画広告に、ビジネスマンが「何年も成果を出していない人と自分の評価が変わらないなんて！」という意味の言葉を叫んでいる場面があり、思わず苦笑した。企業では具体的な利益目標を期間を区切って設定するのだから、社員の評価は目標達成に対する貢献度で測ればよく、

その評価は、少なくとも教育機関よりは説得力をもって行えるのではと想像していたのだが、社員のモチベーションを保つことができる公平、かつ正当な人事考課制度のあり方に悩む企業が多いらしいことがその広告から察せられ、どこでもやはり人の評価は難しいのだと納得したのだった。

先日、文学部の学生に聞いた話だが、企業の新卒採用試験において、大学の学業成績を一切提出させない、あるいは最終面接の段階まで提出させない企業があるとのことだった。企業側が学業成績という大学側の評価をあまり勘案せずに学生の人物評価を独自に行っている状況があるとすれば、新卒者を対象としながら大学の評価が「評価されない」実態をどう受け止めるべきだろうか。仮に、企業が求める能力と大学教育が評価の対象とする能力とが異なっているとしても、教育機関による評価が軽視される事実が実際にあるとすれば、それがなぜなのか、大学側からの積極的な問いかけが必要なのではないだろうか。そうでなければ、双方向性が確立された社大接続は実現し得ない。

一方、大学に入学する際の能力評価では、大学入

試のあり方について、文部科学省は大幅な改革を決定し、1989年度から30年以上続いている大学入試センター試験を、2020年度には大学入学共通テストに移行することとした。この入試改革の主眼は、「知識の理解の質を問う問題や、思考力、判断力、表現力を発揮して解くことが求められる問題を重視する」（大学入試センター「令和3年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針」という点にあり、私立大学においても入学者選抜に同様の方針を反映することについて検討が求められている。大学入学共通テストでは、思考力、判断力、表現力を重視するコンセプトを受けて、具体的には国語と数学に記述式問題が導入されることになっている。記述式問題の導入に関しては、採点の公平性を担保するという大きな課題があるが、文部科学省主導で今後思考のプロセスが評価される方針に舵が切られることにより、大学教育では、いわゆる学修主体の学びにおける学修のプロセスが重要視されるようになり、学修の結果ではなく、結果に至るプロセスをいかに評価するか、その評価方法の研究が加速することになりそうである。蛇足ながら、個

人的に一つ考えているのは、学修プロセスにおいて学修者がどれほど迷い悩んだかを評価することの必要性である。数値には表しにくい指標であることは承知しているが、従来は、できるだけ早く解をみつけることに重きが置かれて見落とされがちだった「悩み抜く力」を測定したいものである。

このように、人の能力に関する評価のあり方は多くの複雑な課題を包含しつつ、社会の動きに応じて変容してきている。ダイバーシティとインクルージョンが唱えられる現代社会では、かつてのようにユニティを基本概念とする評価では通用しなくなっていく。あえていうまでもないのだが、適切さを欠く評価は多様な個々人の個性的な能力を封じたり、減じたり、あるいは潰してしまいう危険を生む。AI時代を迎え、ある局面では型破りな思考こそが求められる社会へ卒業生を送り出す大学としては、何をどう評価するのかという問題を常に意識しておく必要がある。

日本女子大学では、女性の生涯そのものをキャリアと捉えてサポートしている。創立間もない1909年に通信教育を開始、2007年にはリカレント

教育課程を設置して、人生のどの段階でも学ぶことができるとともに、学び直せる場をも提供している。人生100年時代といわれ始めた現代において、人の能力や学修の評価に際しては、短期だけではなく、中期的、および長期的視座を確立し、特に中期的、長期的評価では、個人の潜在能力を引き出して新たなステップへと後押しするような、いわば「励ます評価」を行っていくことが肝要ではないだろうか。同じことが大学教育に対する評価に関してもいえるのではないかと思わないでもないが、それについては語らずにおくことにしたい。

